FD フォーラム「アクティブ・ラーニングの組織的な取り組み」
～社会学部・経済学部・国際学部の事例紹介～

日　時：2013年10月30日（水）17:00～18:30
場　所：関西学院会館　光の間

開　会　の　辞

村　田　　治（関西学院大学　高等教育推進センター長）

高等教育推進センターでは、今年の FD 活動の主題として、アクティブ・ラーニングを掲げており、去る10月２日に神戸三田キャンパスのアカデミックコモンズにおいて、アクティブ・ラーニングの講演会を開催致しました。今回は、西宮上ケ原キャンパスで、学部におけるアクティブ・ラーニングの組織的な取り組みというテーマで、FD フォーラムを開催させていただくことになりました。

実は、関西学院大学は三十数年も前からこのアクティブ・ラーニングを中心とした授業やカリキュラムを組んできました。本日発表していただきますように、各ゼミナールや研究室での取り組みが、まさにアクティブ・ラーニングであり、そのアクティブ・ラーニングの取り組みを、学部内で共有するだけでなくて、他学部の先生方にも参考にしていただく機会を設けたいと考えておりました。

特にここ数年来、アクティブ・ラーニングという言葉が非常に普及してきており、その背景には、学部教育が一体どうあるべきか、具体的には、専門知識だけで良いのか、それともボローニャプロセスにあるキー・コンピテンシーのような汎用性能力の習得が必要なのかといった基本的な発想から、このアクティブ・ラーニングという言葉が出てきたものと理解しています。そういった意味では、関西学院大学では、ゼミナール教育、少人数教育を通じてしてアクティブ・ラーニングを実施していると考えております。

少人数教育という言葉を出しましたが、20人のレベルで少人数なのかというご意見もあるかと思います。例えば国立大学は５人程度でゼミ教育が行われると思いますが、逆に20人、25人であることによって、ひとつのソサエティーができ、そこから色々な人と交わって、自分と異なった人を知り、そこでお互いに共感すべきところ、意見を言うという形ができてくるのではないかと思っております。そういうことから、関西学院大学のような規模で20人、25人の少人数のゼミをしていくということが、実は本当の意味でアクティブ・ラーニングだと思っております。こういったゼミナールをさらに強化をしていく、またさらにいい面を伸ばしていくという意味でも、今日のこの機会を教職員で共有し、さらに育て上げていきたいと考えております。

今日ご発表いただきます、大岡先生、栗田先生、宮田先生、本当にありがとうございます。よろしくお願い致します。

社会学部研究演習・社会調査実習の運営の事例報告

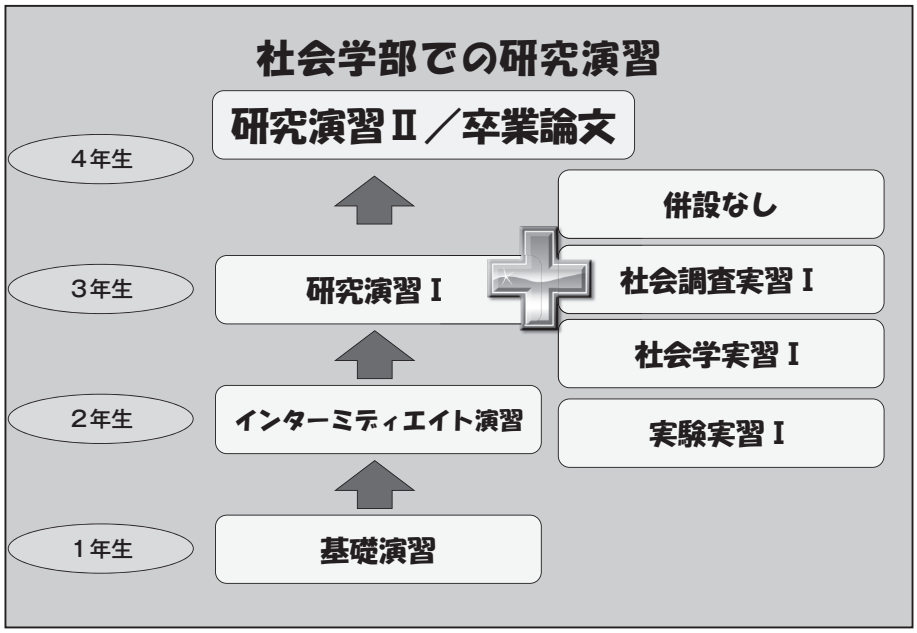
大　岡　栄　美（関西学院大学　社会学部准教授）

1. 社会学部におけるゼミナールの位置づけ

社会学部の大岡と申します。本日は、お忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。私からは「社会学部研究演習・社会調査実習の運営の事例報告」として、社会学部のゼミナールの現状と、私自身のゼミナールにおけるアクティブ・ラーニングに向けた取組み実践をお話しさせていただければと思います。

社会学部の入学定員は650名で、学生数の多い学部になります。その中で少人数形式の授業を、１回生から４回生まで、基礎演習、インターミディエイト演習、研究演習Ⅰ・Ⅱ、卒業論文という形で、継続して段階的に進めています。これらの授業では、ディスカッションやプレゼンテーションなど、グループ学習を通じたアクティブな学びが導入されています。

また社会学部の、３回生からの研究演習では、社会学実習、社会調査実習、実験実習を併設する、もしくは実習を併設しないといういずれかの形でゼミナール運営を進めています。学生は自らどの形式のゼミナールを選択するかを考えます。１ゼミナールの定員は約20名です。

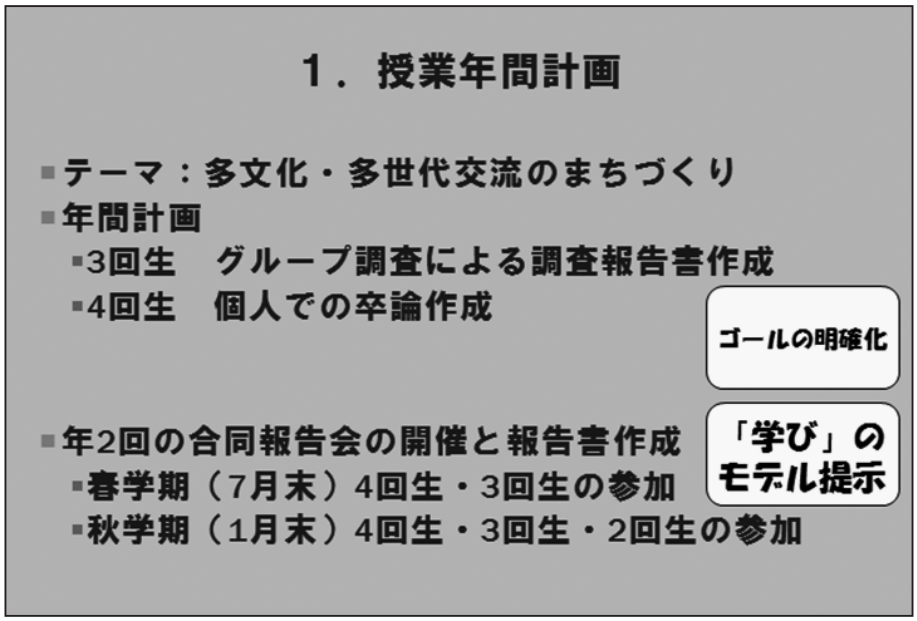


2. ゼミナールの運営

私のゼミナールは「多文化・多世代交流のまちづくり」をテーマに、日本に住んでいる外国人と日本人の間での多文化理解や、多世代の日本人間の交流・居場所作り活動についての調査・実践を行っています。研究演習では主に文献報告を中心に専門分野の理解を深め、併設の社会調査実習でフィールドワークを行なうための質的調査法の取得や調査準備を行っています。

２年間の大まかな計画として、３回生は１グループあたり、４・５人のグループに分かれ、そのグループ単位で調査企画を立て、大学外のフィールドでインタビュー調査や参与観察を進め、その成果を調査報告書にまとめます。グループ学習を通じ身につけた論理的思考力、コメント力、洞察力に基づいて、４回生での個人単位の卒業論文制作に進んでいく流れです。

演習において工夫をしているのが、「ゴールの明確化」と「学びのモデル提示」です。夏期と冬期の年２回、４回生と３回生の合同報告会を開催し、それぞれの研究を報告し合います。また毎年１月末に開催する冬期合同報告会では、翌年度ゼミナールに参加する２回生にも参加してもらいます。３回生は約１年のグループ調査を通じて得た知見を公表し、自らの成長を確認すると同時に、２回生にとっての１年後のゴールを明確化する役割を担います。他方４回生は３回生に対し、翌年度個人で取り組むことになる卒業論文制作のイメージを提供する役割を担当します。これらの機会をもつことで、先輩が後輩に学びのモデルを提供します。また上回生は後輩の研究を客観的に批評することで、自分が演習を通じ培った批判性、論理性などを再確認する機会を得ます。ポイントごとで設けてある成長確認の機会は学生の学びへの動機づけに大きく貢献しています。

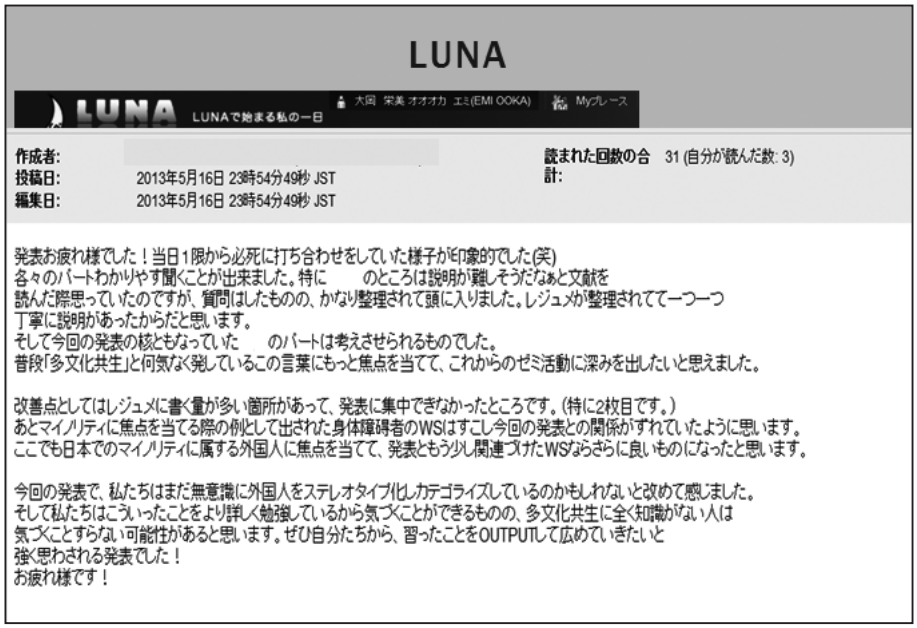


またゼミナールにおいて特に重視しているのが実践的な学習技能とコミュニケーション力の養成です。そのための工夫として、多くのゼミナールで実施されているレジュメを使った文献輪読は採用せず、学生自身にグループ単位でテーマに沿った60分の報告をデザインしてもらっています。文献の要約は行いますが授業前学修を前提とし、パワーポイントを活用しての要約報告にと

どめます。授業内ではむしろ、学びを深めるためのディスカッション、ロールプレイング、ディベートなどに時間を割きます。学生たち自身がそれらを組み合わせた報告全体の流れを自らデザインし、組み立てます。他の学生に興味を持たせ、自分たちの考えを論理的に、分かりやすく伝えるためにはどうすればよいかを考えることで、ゼミナールの学びの中で発想力、表現力、クリエイティヴさを育てる試みをしています。

3. LUNA を利用した授業外学習の取り組み

さらに、本学の学習支援システムである LUNA の掲示板を活用し、ゼミ報告の事後評価を書き込む取り組みも行っています。授業外での学修時間の少なさが指摘されていますが、ICT の活用により、授業時間外で問題意識の深化を図る仕掛けになっています。以下は LUNA の実際の画面です。授業終了後、学生同士がこのような形で、かなり具体的に相互に批判コメントを書き込みます。


LUNA

LUNA LUNAで始まる私の一日　大岡 栄美 オオオカ エミ(EMI OOKA)　Myプレース

作成者:
投稿日: 2013年5月16日 23時54分49秒 JST
編集日: 2013年5月16日 23時54分49秒 JST
読まれた回数の合計: 31 (自分が読んだ数: 3)

発表お疲れ様でした！当日1限から必死に打ち合わせをしていた様子が印象的でした(笑)
各々のパートわかりやす聞くことが出来ました。特に　　のところは説明が難しそうだなぁと文献を
読んだ際思っていたのですが、質問はしたものの、かなり整理されて頭に入りました。レジュメが整理されてて一つ一つ
丁寧に説明があったからだと思います。
そして今回の発表の核ともなっていた　　のパートは考えさせられるものでした。
普段「多文化共生」と何気なく発しているこの言葉にもっと焦点を当てて、これからのゼミ活動に深みを出したいと思えました。

改善点としてはレジュメに書く量が多い箇所があって、発表に集中できなかったところです。(特に2枚目です。)
あとマイノリティに焦点を当てる際の例として出された身体障碍者のWSはすこし今回の発表との関係がずれていたように思います。
ここでも日本でのマイノリティに属する外国人に焦点を当てて、発表ともう少し関連づけたWSならさらに良いものになったと思います。

今回の発表で、私たちはまだ無意識に外国人をステレオタイプ化しカテゴライズしているのかもしれないと改めて感じました。
そして私たちはこういったことをより詳しく勉強しているから気づくことができるものの、多文化共生に全く知識がない人は
気づくことすらない可能性があると思います。ぜひ自分たちから、習ったことをOUTPUTして広めていきたいと
強く思わされる発表でした！
お疲れ様です！

他者の意見を批判するためには、事前に課題文献を読む必要があります。また授業後にはゼミ生全員が見る掲示板にコメントを書くため、簡潔かつ、論理的に伝える力も必要になります。さらに自分がコメントをする前に前の人のコメントを見て省察しながら、自分の意見の独自性を考えます。これらの取組みを通じ、授業外学修時間を自発的に増やす運営をしています。

4. 地域との連携と情報発信

私のゼミナールでは、現在４つのグループに分かれ、フィールドワークとインタビューなどの調査・実践活動を大学外で実施しています。具体的な活動としては、１）神戸市東灘区にある「こうべ子どもにこにこ会」と協力した、外国にルーツを持つ子どもたちの夏休み宿題教室の運営、２）外国にルーツをもつ子どもたちに「自分たちの将来像」について考えてもらう関西学院大学でのオープンキャンパス企画の実施、３）兵庫県三田市における「フレンドシップデイ in 三田」

という国際理解イベントの企画・運営、４）兵庫県丹波市における、兵庫県立柏原高校インターアクト部と連携した、丹波地域で増えている外国人に対する意識調査、です。

いずれの場合にも、学生が大学外のフィールドである地域社会で魅力ある大人と出会い、成長する機会を得ています。これは、私のゼミナールに限られることではなく、社会学部の数多くのゼミナールで研究テーマに応じ、様々な地域との連携を図っています。この結果学生は非常にアクティブに地域課題を発見し、問題解決能力を養う機会をいただいています。無論さまざまなサポートが必要になりますが、地域での調査実践は学生のアクティブ・ラーニングを活性化する大きな効果をもっています。

また大学外の地域で活動する際、私のゼミナールでは、ゼミナールのブログやフェイスブックを通じて、自分たちの学びを見える化する取り組みを行なっています。これは最初にお話ししたゴールの明確化の話とも繋がっています。フィールドワークは継続的に時間のかかる大変な作業のため、学生側も自分たちの活動のゴールが見えにくくなりやすいです。そのためブログやフェイスブックといったオープンな場で、自分たちの取り組みを発信し、地域の関係者や先輩などの外部から活動への反応を得ています。情報発信への反応から自分たちの活動の影響や効果を実感し、学びへの動機づけとなることを期待しています。

そもそも私のゼミナールでは、フィールドワークによる社会調査がメイン活動になっていますので、活動記録をつづっていくこと自体が非常に重要です。それを公開することの教員側のメリットとしては、各グループの学習や調査進度を確認できることがあります。ピア・ラーニングといいましても、教員のアドバイスが必要なところが当然出てきます。活動の状況に応じたアドバイスをするうえでも、これらのメディアを通した情報発信は非常に役立っています。また学生は、ブログやフェイスブックでは自分の活動を学外に向けて書かなければならないので、自分の活動を客観視して発信する必要があります。そのため言葉遣いに気を使うようになるので、メディア・リテラシーの養成にも繋がっていきます。

ところで地域の中でニーズのある課題に対して、ボランティア活動で学生が取り組んでいき、実際の活動を通じて、より社会とつながった問題に対する学びを深めていく学習法に「サービスラーニング」があります。現在ゼミナールで実施している地域での調査・実践活動は、学士力として非常に求められている課題発見能力や提案力、あるいは色々な世代の人や立場・役割の人と繋がるコミュニケーション力を鍛えることにもなると考えております。しかし、このサービスラーニングについては、なかなか受け入れ地域との信頼関係をつくっていくのが難しいという問題があります。ブログやフェイスブックなどのメディアを通じ情報発信をすることは、活動のパートナーに当たる方に予めゼミナールや学生の顔を見える化し、連携をスムーズにする効果もあるのではないかとも期待しています。

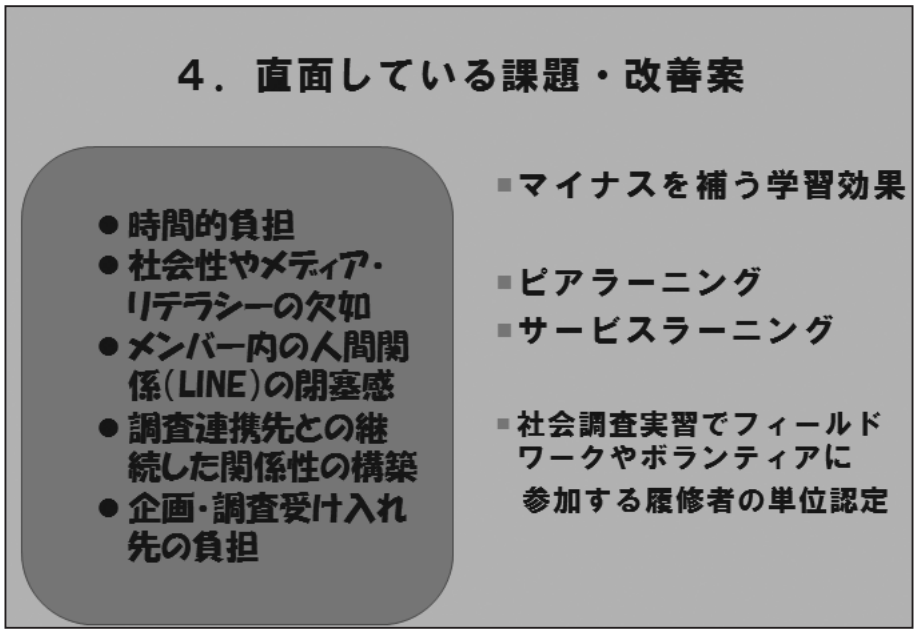
5. 今後の課題

以上、私のゼミナールでの実践を中心に、アクティブ・ラーニングを取り入れた学びの試みについてお話しさせていただいてきました。しかし、ゼミナールの中でアクティブ・ラーニングを実践する上で直面している課題もあります。私のゼミナールの場合、社会調査実習に関しての学生の時間的な負担が非常に大きいという問題があります。最初に申し上げましたが、社会学部の

研究演習は必修科目であり、学生全員がどこかのゼミナールに所属しております。しかし、その形態は非常に多様であり、研究演習に費やす時間が学生によって異なります。その中で、学生のモチベーションを損なわない活動時間の最適化については社会学部の中でさらに情報交換をしたいと考えています。

次に、先ほど申しました地域社会に向けての情報発信ですが、学生のリテラシーは技術の進歩に追いついていない面も多く、公共の場における情報発信には何らかの研修が必要かと考えております。またメディア・リテラシーの養成のみに限らず、地域での調査・実践活動やサービスラーニングをゼミナール運営に取り入れる際には、どのような導入的研修を学生に向けて実施していくのかを、学部全体として考える必要もあるでしょう。

また、社会学部の場合、フィールドワークでの地域連携を進めていく場合に、学部に地域連携を担当するコーディネーター的な役職がないので、ゼミナール単位で、各教員がフィールドとの関係性をつくっていることも課題かもしれません。コーディネーター的な役割をどのように学生のアクティブ・ラーニングのために活用していくのかといったことについても、今後の検討課題ではないかと個人的には考えております。



とはいえ学生の主体的学びを促すアクティブ・ラーニングには、先ほど申し上げたような課題のマイナス効果を補う非常に大きな可能性を日々感じております。以上私のゼミナールでの取り組みの紹介が中心になってしまいましたが、皆様のご参考になれば幸いに存じます。ご清聴ありがとうございました。

経済学部のゼミ教育・キャリア教育の取り組みと課題

栗　田　匡　相（関西学院大学　経済学部准教授）

1. 経済学部におけるゼミナール教育の位置づけ

経済学部で学部長補佐をしております栗田と申します。本日は「経済学部のゼミ教育・キャリア教育の取り組みと課題」として、経済学部全体の取り組みを中心にお話しさせていただきたいと思います。

以下のスライドは、経済学部の１年生から４年生までのゼミナールの流れを示したものです。経済学部では、１年生から基礎演習が始まり、１クラス20人ぐらいの少人数教育を実施しています。２年生の春学期にゼミナールの選択を行いまして、その後、２年生の秋学期からゼミナールが始まり、３年生、４年生と続くことになります。

まず、基礎演習ですが、目的は経済学を学ぶ準備段階として幅広い視野と基礎力を身に付けることにあります。具体的には、高校を卒業して入学してきたばかりの学生が多いので、文献検索の方法やリポートの書き方、非常に基礎的なプレゼンテーションやディベートの方法などを一緒に学んでいく授業です。この基礎演習の特徴的な取り組みを２つお話致します。

１つ目は１年生全員が参加するスポーツ大会です。５月上旬の土曜日に開催し、入学直後の時

期に基礎演習のクラスで力を合わせることにより、連帯感や基礎演習に取り組みやすい環境を与えることを目的としております。

２つ目はインターゼミナール大会です。ディベートをする大会ですが、これは11月中旬の土曜日に開催しています。先ほどのスポーツ大会が体を動かして連帯感を高めるのに対して、こちらは基礎演習対抗のディベート大会で、活発な議論やコミュニケーションを図って連帯感を高め、学習能力の向上を図ることを目的としております。実はこのインターゼミナール大会は、１年生が午前中にディベート大会を行い、午後に３年生、４年生の研究発表もしくは、ディベート大会が行われます。実は、このような取り組みを教員や事務職員だけで進めていくには非常に難しいので、エコゼミ委員会と呼ばれる経済学部の学生団体が活躍してくれます。彼らが、教員や事務職員とコミュニケーションを取りながら、スポーツ大会とインターゼミナール大会の企画・運営をしてくれています。

その他にも10月の土曜日に関関戦として、関西大学とのディベート大会もしくは研究報告会を経済学部独自に開催しており、ここでもエコゼミ委員会の学生たちが運営面でのサポートをしてくれます。またエコゼミ委員会では、経済学部の教員とともにエコノフォーラムという雑誌を発行しており、その事務的な手続をサポートしてくれています。このエコノフォーラムは、ゼミナールでどんな勉強をしているかということや経済学の基礎知識などを掲載しています。

2. 教育支援体制

次に、教育支援体制についてですが、学習をスムーズに行なうためには、経済学部として教育支援体制を確立することは非常に欠かせないと考えています。先ほど村田センター長からもお話がありましたように、アクティブ・ラーニングを進めるためには、活発な学生同士の討論が必要ですので、経済学部では、学生用の学習スペースを経済学部棟の中に設置しており、図書館側の

入口近くと地下１階には、学生が使える談話室も設置しています。両方とも自由に、講義の空き時間等に利用できる部屋です。また、ゼミナールの発表やディベートの準備などの打ち合わせ用に学生ワークルームが１階にあります。また準備にパソコンが必要ですから、１階にある資料準備室でノートパソコンを学生に貸し出しており、自由に使えるようにしています。

3. 専門ゼミナール教育

次に、専門のゼミナール教育に話題を移しますが、２年生の春学期にゼミナールの選択期間を経て専門ゼミナールに所属します。３・４年生の専門ゼミナールである研究演習は、他学部でも当然ありますが、経済学部の特徴的なこととしては、２年生の秋学期から始まることです。３年生以降の専門学習に向けての準備期間として、専門学習をスムーズに移行できるための時期になっています。また、就職活動が徐々に早くなってきており、研究をする時間が３年の春からになると、３年生の秋学期が就職活動で潰れて継続的に時間を取れないので、２年生の秋学期から始めて、１年間じっくり研究に充てるという目的もあります。

ただ、２年生の春学期にゼミナールがありませんので、それを埋める経済学部独自の取り組みとして、キャリア教育を実施しています。４つの講座が開かれていますが、本日は、「キャリアデザインと仕事」、「キャリアワークショップ」の２科目について、ご説明致します。

2012年度以降の入学生は、ライフデザイン科目から２単位を必修科目にしています。「キャリアデザインと仕事」は、関西学院大学経済学部の OB、OG の方にお越しいただいて、現在の仕事についての講義を行なっており、「キャリアワークショップ」はゼミナール形式で授業を実施しております。具体的には、企業の方々を講師に迎えまして、企業の社員研修を学生版にアレンジしてもらい、働くとは何かということを学生に考えさせることや、さまざまなテーマについてプレゼンテーションの機会を与えることなどを展開しております。2013年度は三井住友銀行様の

クラスと、大日本印刷様、NHK 様そして野村證券様の３社が合同で実施していただいたクラスの合計２クラスを開講しました。非常に活発な議論が行われており、大変好評であったと聞いております。「キャリアワークショップ」は、少人数クラスで、非常に人気科目になっておりますので、１年生の秋学期に選考を行なっています。

4. その他の取り組み

さらに経済学部では、キャリア教育の一環として学生が将来をイメージできるような工夫を行なっています。具体的には、ウエブサイトで「われら関学経済人」というコンテンツを作成し、経済学部の卒業生で、社会で活躍されている方々を随時紹介しています。今の学生たちからは、将来のビジョンをうまく持てないということをよく聞きますが、社会で活躍されている方を紹介することによって、学生に１つの道を見せていければよいと思っております。これはおおよそ３年前から始めており、毎月１名のペースで紹介をしております。

また、昨年からはフェイスブックも立ち上げております。現在、経済学部でどのような取り組みを実施しているのか、企画されているのか、学生がどのような活動をしているのかといったことを知ってもらうことを目的にしています。実は、現役の学生達も意外と知らないこともありますので、現役の学生同士や卒業生とも縦や横の繋がりを深めることも目的としています。上記以外の取り組みとして、言語科目担当教員による専門ゼミナールを開講することや、次年度からのゼミナール選択方法も希望のゼミナールに入りやすいように、選考のプロセスを変更するなどの工夫をしております。

5. 今後の課題

最後に今後の課題として、ゼミナールは必修科目とはせずに選択科目に変更しましたが、それほど多くはないですが、就職活動を終えた学生がゼミナールをやめてしまう事例がでてきました。つまりゼミナールが就職活動で自己 PR で話すための実績づくりとなっており、このような学生に対して、フォローアップが必要だと感じています。また、キャリア教育は、１・２年生の学生に対して取り組んでいますが、非常に人気の科目であり、また学生からの満足度が非常に高い科目になっていますので、３年生以降もキャリア教育を続けたほうが良いのではないかと考えています。

以上で、経済学部の報告を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

国際学部におけるアクティブ・ラーニングの組織的な取り組み

宮　田　由紀夫（関西学院大学　国際学部教授）

1. 国際学部所属教員の取り組み

国際学部は、多くの先生がアクティブ・ラーニングによる特徴的な授業を行なっておりますので、まずその取り組みを簡単にご紹介し、その後、私自身の取り組みについてご紹介したいと思います。

まず、ご紹介するのが、他大学との合同ゼミナールによるディスカッションです。多くのゼミナールで実施されていますが、特徴的だったのは、３大学の学生を混成にして、ディスカッションを実施するという事例です。他大学の熱心な学生を知ることができる意義もありますし、やはり対抗意識が自然とでてくるので、負けたくないということで一生懸命勉強するようになる効果があるとのことです。次に、ゼミナールでのビブリオバトルです。ゼミナールの学生が自分の気に入った本をプレゼンテーションして、そのプレゼンテーションを聞いた学生が、どの本を読みたくなったかを投票して、投票数が一番多い人が優勝という仕組みです。それから、国際学部は小規模なクラスが多いので、グループでのプレゼンテーションを講義授業の中で実施する取り組みもありました。

もう一つ、経済・経営特別演習という科目をご紹介したいと思います。この授業は、履修生を40名に制限をして、春学期の３・４時間目を連続して実施しています。講師を企業の部長や副社長など幹部クラスに依頼しています。まず講師から「私のプロジェクトＸ」という題目で45分間講義をしていただき、その後、１グループ８名の学生が講師の企業を事前調査した上で質問をする形式を取っています。４時間目は、質問担当ではない学生も一緒に加わってディスカッションをするという授業です。

これら一つ一つの授業は、授業担当者の努力と人脈などにより、満足度の非常に高いものになっておりますが、まだまだ組織的な取り組みに繋がっていないので、その点は課題だと感じております。

2.「大学進学の理由」をテーマとした基礎演習での取り組み

それでは、私の授業での取り組みをご紹介致します。１年生の春学期に開講している基礎演習Ａで実施するグループプロジェクトです。これは、「大学進学の理由」というテーマで１グループ４・５人のおおよそ３グループで、アンケート調査を実施する取り組みです。

まず、授業担当者である私から労働経済学の観点から「大学進学の理由」について講義を行ないます。ここでは人的資本論、つまり自分が大学に進学すると能力が高まって、生涯賃金が高ま

基礎演習でのグループプロジェクト（宮田）

- 「大学進学の理由」 グループごとのアンケート調査。
- 1グループ、4～5人。1クラスで3グループ。
- 労働経済学による説明（教員）

(1）本人の投資
（1a)人的資本論、(1b)シグナリング論）
(2)本人の消費
(3)親の投資
(4)親の消費

ることが理由とする考え方や、シグナリング論といって、大学へ進学する理由は、大学に入学しても能力は高くならないが、自分は頭が良いということを会社に示すことで、結果として生涯賃金の高い就職先に就職できるようになるという考え方、この２つの考え方が「本人の投資」ということになります。次に「本人の消費」、つまり世の中にはやはり、大学に進学する理由が勉強をしたいことや、キャンパスライフが楽しいからという人もいます。また、「親の投資」、子供が生涯賃金を上げてくれたら老後を養ってくれるから大学に進学させるという理由もあります。最後に「親の消費」、つまり自分の子供が良い大学に進学したことを自慢したいという理由もあります。そのような理論を授業で簡単に説明します。次に、学生にこの５つの仮説を検証するアンケートを作成させます。作成したアンケートを出身高校に持って行き、アンケートを実施します。この授業の意義は、まず、高校時代に深く考えたことがなかった大学に進学する意味を再考させることにあります。労働経済学の観点から言いますと、大学に進学する費用は、４年間高校卒業して働いて得られる所得を犠牲にして捻出しているわけですから、なぜ大学に入ったのか、その意義を考えさせる目的があります。

本日のテーマに一番関係がある目的が、グループで学習する経験です。高校でも総合学習がありますが、学生に尋ねるとグループ学習はあまり経験がないとのことでした。そのため、授業評価の自由記述欄では「グループ学習に初めて取り組んだが、大変良い機会だった」という感想が多く、好評です。やはり、今まで経験したことのないことを経験できたという成功体験は大変重要ですし、ゼミナールの学生同士が仲良くなることも満足度に影響していると思います。また、質問項目の作成や集計作業は授業時間以外に準備を行なわないと発表できないように、あえて学生に労力をかけさせるように工夫をしています。それに関連して、グループで発表した後、個人レポートをつくらせることをしています。これは、教員からすると、授業時間以外の取り組みの評価が難しいので、個人レポートを書かせることによって、積極的に関わっていない学生との差

がレポートから現れてくるからです。それから、自分の出身高校の先生に挨拶に行くという意義もあります。ただし、色々な理由で行きづらい学生には強制しないように配慮をしています。１年生の春学期なので、統計的な処理が稚拙なところもありますが、経験に重きを置いた指導を心がけています。

このやり方の問題は、多くの教員が同じことをすれば、本学に多数の進学者を出している高校には、アンケート依頼が殺到することになり、先方に迷惑がかかるということです。学部単位でシステマティックに行うのならば、担当教員間でのアンケート先の事前の調整（場合によっては出身校でなく、関学の同級生を対象にするなど）が必要となりましょう。

以上、拙いお話でしたけどもご清聴ありがとうございました。

閉　会　の　辞

北　村　昌　幸（関西学院大学　高等教育推進センター副長）

まず、ゼミナールを担当している教員の立場からすると、ゼミナールに所属している学生をどのように指導していくかということが非常に大事だと思います。しかし、学生は自分が所属しているゼミナールの教員の授業だけを受講しているわけではなく、さまざまな講義科目や専門科目、あるいはゼミナールに所属する前の基礎ゼミナールなど、いろいろな科目を受講した上で３・４年生の専門的なゼミナールを受講しています。

そう考えますと、学生の学習意欲を考える上では、教員１人だけで学生をうまく指導していけるわけではなく、学部内で教員がお互いに情報交換をしながら学部として、例えば基礎ゼミナールと専門のゼミナールとの関連性や連携といった、４年間での教育をうまくデザインしていくのが非常に重要だと感じます。

そういう意味でも、本日この場に来てくださった教職員の皆様には、ぜひ各学部にお帰りになった後、ここでのお話をそれぞれの学部の中で共有していただければと思います。

本日は、本当に皆様この場にお越しくださいまして、ありがとうございました。